

或る事情のため、物凄い多忙



貨物船 ①

この夏、医師山本勤也の手紙が見つかった。高知市の自宅で長女の浦吉由美子が和だんすを整理しているとき、古びた封筒が出てきたのだ。表には赤鉛筆で「弥彦丸関係」と書かれていた。

中には手紙12通、電報12通、はがき6葉があった。このうち、妻の千世子に送った手紙は6通で、山本が船医だったころに書かれたものだ。

乗船した期間は1954（昭和29）年3月からの3カ月足らず。徳島大学医学部の助手で、貨物船にはアルバイトとして乗り込んだ。

徳島市に住む妻千世子への最初



1954年当時、弥彦丸の船医だった山本勤也

この手紙には「ドクターと皆に呼ばれるので少し面ハユイ」ともしたためていた。

食事も御馳走で朝は生卵と味噌汁だが昼夕はカキフライ、ピフテキ、コロッケ、焼魚、サシミなどが出て来て仲々おいしい。（3月6日）

もう大概のシケにも平気となり、船酔もしなくなった。荷物を積まない往路の時は一寸海が荒れるだけで物凄く揺れ、机の上のものから何から全部引っくり返るけれど、馴れてしまった。（3月22日）

山本は当初、貨物船の米山丸に乘っていたが、船体に亀裂が入り、弥彦丸に乗り換えた。

いずれの船も南太平洋のマカテア島と日本を往復する航路に就いていた。マカテアはリン鉱石の産地だった。

弥彦丸は5月30日、東京に戻っ

た。妻に宛てた最後の手紙は6月3日の消印だ。「東京高輪南町」（東京都港区区内）の郵便局から送られていた。

それまでですごぶる快活な調子だったが、この手紙は様子が違う。

其の後皆元気の事と思う。私も至極元気で故國の土を踏んだ。早く手紙を出すつもりが或る事情のため、連日連夜物凄い多忙のため延引してしまった。この事情はいづれゆっくり話をするけれど、今一寸書く事は差引え（原文ママ）させられているので書けないのは残念だ。

しかし千世子も多分感ずいている（原文ママ）かも知れないが例のあの問題で。未だはつきりどうこうという事は判らないけれど。近所の人達にも言はない様に。徳島より火の手が出たなど言はれると面目まるつぶれだから。

その言葉通り、「或る事情」は最後まではつきりと語られなかった。ただ、山本は、弥彦丸で何が起きていたのかを医師らしいやり方で残していた。

敬称略

（西村奈緒美）

板ばさみに苦しんでいる



南洋の雪 貨物船 ②

弥彦丸は1954年1〜5月、南太平洋のマカテア島と日本を2往復していた。米国はこの年の3月1日、ピキニ環礁で水爆実験を行った。それは5月14日まで計6回実施された。

船医の山本勤也が書き残した航路を見ると、1度目の往路は米国が設定した危険区域のやや東側を、2度目はさらに東側を大回りするように航行している。

山本が船医として乗ったのは2回目の航海だった。3月22日に横浜を出港して、5月30日に東京に戻った。山本は「或る事情」に触れないように、妻千世子に宛てた6月3日の手紙につづった。

長い航海であった。言いたい事、書きたい事は山ほどあるが今はそれをくどくどと書く時間さへ

ない。次の連絡船で又打合せやその他の連絡で行かねばならぬ。

東京へは千世子を呼ぼうかどうしようかと随分迷ったがこの問題を考えて、涙をのんで断念した。この気持は判ってくれると思う。

然し結果においてはこの方がよかったかも知れぬ。というのほろくすっぽ東京見物も出来ない。毎日事ム所(三井)、及港出張所、病院、船の連絡や医者本来の仕事に体を休める暇もない位だから。

医者として人道上の問題と会社の事情との板ばさみに毎日苦しん

でいる。

なぜ板挟みになっていたのか。

手紙に書くことを差し控えさせられた「或る事情」が背景にあったことは想像に難くない。

弥彦丸の船員たちは体調不良を訴えていた。帰国後、船員48人全員が東京で診察を受け、白血球が少ないといった理由で2人が入院した。さらに回航先の岡山では6人が「放射能症」の疑いで入院した。

山本は航海中、診察した船員の病状をドイツ語で記していた。帰国後は、血液を調べた船員全員について、白血球や血小板の数値などを一覧表にして書き留めていた。長崎の被爆者の症状と比較したメモもあった。

こうしたデータを基に、山本は「第十回日本皮膚科泌尿器科学会四国地方会」で発表するための原稿を書いた。その資料もやはり山本の自宅に大切に保管されていた。

演題が記載されたB4判用紙は3番目の発表者の名前に線が引かれて消されていた。その上に「山

本勤也」と書き足されていた。

学会が開かれた日付は、山本が帰国した約1カ月後の6月27日とある。開催場所は、山本が所属する徳島大学医学部だった。

発表内容は400字詰め原稿用紙で5枚。山本は冒頭にこう書いている。

ピキニ諸島の水爆実験に伴う第五福龍丸事件などありましたので航海中は出来るだけ雨に濡れない様にしたり、海水入浴の制限を行ったり、又帰路はピキニ周辺450哩の危険海域より更に500哩離れて帰ったのであります。

山本は船員たちの様子についても説明していた。

全航海中特に作業を休む様な患者はありませんでした。軽度の全身倦怠、微熱、頭痛、下痢、便秘、歯齦出血などの患者が散発しておりました。これ等の患者は投薬により間もなく治癒しております。したが、東京入港3日前(5月29日)(原文ママ)に操舵手が1名頑固な眩暈を訴え、入港後診察を受けた際白血球数の減少を認めましたので一應放射能の影響も考慮し、全員の血液像の検査を行ったのであります。

敬称略

(西村奈緒美)



山本勤也が書き残した弥彦丸の航路図や船員の血液を分析した資料など

果して放射能によるものか



南洋の雪

貨物船 ③

弥彦丸の船員たちが体調不良を訴えたのは、ピキニで被曝した影響だったのだろうか。学会発表用の原稿を書くにあたって、山本勤は医師として慎重に筆を進めている。

果して放射能によるものか或は単なる遠洋航海によっておこった現象かは大いに疑問のある所でして、これは入院者の其の後の検査、次航海後の検査などにより更に検索追求の必要があると思っております。

遠洋航海になりますとどうしても新鮮な食料に不足し、その為の貧血症状、歯齦出血などは勿論考

えられますし、更に熱地特有の高熱、高熱に加えて船揺れ等悪条件下の労働による体力消耗の影響も考えねばなりません。

そのように留保しながらも、広島、長崎の被爆者たちの症状と比較して、ある結論に至る。

我々の場合も前航海が水爆実験

① 船員血液検査結果表

船員番号	検査項目	検査結果	備考
101	ヘモグロビン	11.5g/dl	正常
102	ヘモグロビン	12.2g/dl	正常
103	ヘモグロビン	11.8g/dl	正常
104	ヘモグロビン	12.5g/dl	正常
105	ヘモグロビン	11.9g/dl	正常
106	ヘモグロビン	12.1g/dl	正常
107	ヘモグロビン	11.7g/dl	正常
108	ヘモグロビン	12.3g/dl	正常
109	ヘモグロビン	11.6g/dl	正常
110	ヘモグロビン	12.4g/dl	正常

料。船医の山本勤也が書き残した

地より比較的近距离を通った事、海水使用を制限したとはいへ、米其他食料品の水洗は連日海水を使用せねばならなかった事、軽度ながら頭痛、下痢、眩暈等の患者が出た事、血色素上昇性の貧血特に白血球減少者の多い事、職種別に見て日光にさらされる時間の多い甲板関係者に白血球減少者の多い事、更に船体より200カウン

ト検出された事などより或程度放射能による影響も考えられると思えます。

だが、弥彦丸の被曝が世間の注目を集めることはなかった。

当時の報道の中心にあったのは漁船の被曝だった。食卓に上るマグロが汚染されたかもしれないという恐怖が日本を覆っていた。国は魚の放射能検査を行い、1954年末までに魚を捨てた漁船は992隻に上った。「原爆マグロ」と呼ばれ、魚価も下がった。

その一方で大型外航船の放射能検査については、国は「船主から要望があった場合」にとどめていた。貨物船、客船といった商船の放射能検査は進まなかった。

運輸省（現国土交通省）船員局が54年11月にまとめた報告書では、38隻が検査され、船体から50〜2千カウント程度の放射能が検出されたとある。弥彦丸をはじめ、神通川丸、東和丸、陽興丸、しどにい丸は「入院患者、通院患者又は要注意者等を出すに至つた」と書かれている。

その2カ月後、米国が見舞金として200万ドル（当時の円換算で7億2千万円）を支払うことで日米政府は「完全な決着」を図った。見舞金の大半がマグロの生産者に支払われ、商船に支払われた分はわずか127万円だった。

こうして弥彦丸の被曝は長い間、忘れられることになった。弥彦丸が耳目を集めたのは、山本が下船してから22年後のことだ。船員の一人が「ピキニの水爆実験で被曝し、いまも病気で苦しんでいる」と名乗り出たためだった。

敬称略
(西村奈緒美)

年賀状が来ていたのに



貨物船 ④

1976年6月18日付の朝日新聞夕刊は「今も「死の灰」の病苦 22年ぶり申し立て」の見出しで、弥彦丸の船員だった平三義の訴えを報じた。ビキニの水爆実験の影響で病気で苦しんでいる、船員保険を継続給付してほしい、との内容だった。

記事によると、弥彦丸の船員6人が「放射性物質による白血球減少の疑い」で岡山大学付属病院に入院した。平もその1人だった。平は長崎県に帰郷して治療を続けた。半年後に仕事に復帰したが、入院は続き、退職を決める。その後船員保険で治療していたものの、療養費の支給は3年で「期限切れ」に。自費で治療を続け、75年に被爆者健康手帳を県に申請すると、長崎と広島の前爆被爆者だけが対象と断られた。

ルポライター堀江邦夫は記事

を読んで驚いた。「第五福竜丸以外にも被爆者がいたのか」。当時の厚生省や運輸省、外務省など関係省庁を回ったが、どこに行っても「資料はない」「記憶にない」「わからない」。堀江は77年、月刊誌「創」にルポを発表した。

「平さんは、口を開くのも苦しげに、ゆっくりと言葉を短く区切りながら、二十年前の「あの日」のことから話し始めた。

『それは急にきたんです。仕事の中にめまいがして、物につかま



マカテア島沖から見える弥彦丸。1954年、船医の山本勤也が撮影した

ておらんことにはいられません。他の連中は仕事中は夢中でわからん、止めると頭が痛いという具合だった』

治療費の無料化を県に訴えた平のめいの話も聞いた。「もういやになるくらい、あちこちと窓口から窓口を、タライまわし」させられました。『そでの下』を要求してくる職員もいて、幾度あきらめようと思ったかしれません』

朝日新聞西部本社デスク長谷川千秋も「何百隻という船が『死の灰』を浴びていたのに、公的な健康調査は放置されたままだと初めて知り、ショックを受けた」。79年に取材班をつくり、弥彦丸の調査に乗り出す。

船員48人中、生存者は38人で、そのうちの25人が健康不調を訴えていた。亡くなった10人は8人が病死で、4人ががんだった。

80年1月1日付の西部本社発行版朝刊1面で詳報し、48人全員の健康状態を一覧にした。船員たちの話を5回にわたって連載し、「ビキニ問題は25年が経ったいまも解決されていない」と書いた。

結局、平の訴えは認められな

った。86年、71歳で死去した。亡くなる前、平と電話で話をした人物がいる。高知県で漁船の元乗組員を追跡調査していた高校教諭の山下正寿だ。山下の記憶では、平は「被爆者として認めてもらうのはもうあきらめかけている」と寂しげな口調だった。

山下は弥彦丸も調べ始めた。船医の山本勤也が高知市で開業医になったと知り、足しげく訪ねた。山本は「乗船中に核実験のことを聞き、甲板を歩く時は傘をさし、海水を浴びるのを控えるよう乗組員に言った。だが、赤道直下で暑いので、みんな、海水の風呂に入っていた」と語った。

平のことも覚えていた。「めまいがひどくて入院した人だったね」。山本は「或る事情」から30年以上経っても、船員の健康を気にかけていた。

「山本さんは『あの人はつい最近まで年賀状が来ていたのにこなくなつた』と言っていた。お医者さんやなあと思いました」

弥彦丸の船医だった山本も、船員だった平も、歴史の証人だった。ビキニの被曝が第五福竜丸など漁船だけではないことを、彼らの存在が伝えていた。

貨物船の弥彦丸に乗ったふたりから聞いて、山下はこう話している。「被災船は漁船にとどまらない。被害の全容は不明のままだ」

敬称略

(西村奈緒美)

連絡船までの時間が無い



貨物船 ⑤

「乗船中は並々ならぬ御世話に預かりまして、厚く御礼申し上げます。又入院の節は、大変御迷惑を御掛け致しまして、有難うございました」。丁重に礼を述べ、近況をつづっていた。

弥彦丸の船医だった山本勤也は晩年、骨髄の病気を患った。2008年、86歳で亡くなった。

妻の千世子は高知市で暮らし、月に一度のペースで、長女の浦吉由美子が都内から戻ってくる。母を見舞い、時間を見つけては実家の荷物を片付けている。

船上で書かれた手紙は今年の6月に母の和だんすから、船員の症状を書き取ったメモや学会発表用の原稿は9月、父が保管していた資料の中から見つかった。

浦吉は「鳥肌が立つほど驚いた」と語る。「(元漁船員たちによる国家賠償請求訴訟が行われている)この時期に出てきてくれたのは、父が何かを伝えたがっているからかもしれない」

南洋から帰国後、東京の病院に入院した船員の礼状も残されていた。

者が訪れ、夜でも急患が入れば対応していた。「口数が少なく、必要なこと以外はしゃべらない。家に帰ると机に向かって書き物をしていることが多かった」

ただ、亡くなる直前には「死んだら歯を調べてほしい」と訴えていた。放射線を浴びていれば歯に痕跡が残る。頼まれた郵送先には該当の医師が既におらず、あきらめざるを得なかった。

父の遺品には取材を受けた新聞記者の名刺や放射線の影響を報じた新聞記事、ビキニの被曝に関する医学論文があった。

母が被曝を案じていたこともわかった。弥彦丸の航海を終えて自宅に戻ることが決まると、親戚が「はげちゃびんになったと違うの」と聞いてきた。そのときのことを母はにこやかに話していた。「会った瞬間、髪があったので安心したのよ」

62年前、1954年、弥彦丸の航海の終わりに山本が妻に送った手紙。「或る事情」を書くことは「差し控えさせられている」と記していた。重苦しいまま終わるか

と思いきや、後段は突然、明るい調子に変わる。

千世子は自転車に乗れる様になったらしいが非常に結構。女子用の新品を一台是非買おう。皆で自転車ハイキングにも行きたい。自転車は少し乗れる様になった時一番ケガをしやすいからくれぐれも注意する様に。

(中略)

この島(マカテア)のフランス人の医者の家へ寄られて(原文ママ)フランス料理を御馳走になり貝など貰った。椰子の実を1ヶ持って帰って来た。

幼子を抱える若い妻が不安をいだかぬよう、青年医師が気遣ったのだろうか。手紙は次のように結ばれる。

もう連絡船までの時間が無い。これから又病院と三井の本店へ行かねばならぬ。

私は全然異常なく元気だから、安心する様に。会う日を楽しみにしている。では元気で
6月3日午前10時

千世子殿 勤也

敬称略
(西村奈緒美)

南洋の雪「貨物船」は今回で終ります。次回「公開」は11月に掲載します。



晩年の山本勤也と妻の千世子